

ラブ・イン・スパイン

## あらずじ

京子は夫・貴文と9歳の息子・雄馬と共に平凡で幸せな生活を送っていた。だが雄馬が担任教師の桑田の体罰が原因で死亡する事件が起き、生活が一変する。夫婦関係は破綻し、法も社会も桑田を罰さない。雄馬の一周忌を迎える頃、京子の精神状態は不安定になり、毎日桑田の家を向かいのアパートから見張るようになる。京子は決意する。雄馬の命日に桑田を殺す…。

カウンセリングセンターに通う京子はカウンセラーの斉木と出会う。斉木は京子の心を見抜き、カウンセリングを受けることを勧める。抵抗を感じる京子に斉木は宣言する。「命日までの十日間であなたの気持ちを変えて見せる」

二人はカウンセリングを通して奇妙な人間関係を築く。斉木にとって最初は全てが駆け引きだった。時に無駄話をし、時にわざと怒らせることにより発散させ、徐々に殺意を失わせていく。それが手法だった。だが京子の言葉を聞き、同じく家族を持つ斉木の中でも社会への疑問が膨らんでいく。

京子は何があっても決意が揺るがない自信があった。しかし斉木の態度と人間性に徐々に惹かれていってしまう。だが雄馬を死なせた母親として、愛する者を作り復讐をやめるなどできない。何より斉木には愛する妻と息子がいて、手の届かない存在だ。やはり自分に残された道は一つしかない。

一方の加害者側。桑田の妻・佳奈は桑田の犯した罪を受け止め、夫を支えていくつもりでいた。桑田と共に事件から立ち直りつつある頃、向かいのアパートの視線に気づく。夫を守るため、佳奈は京子と対決することを決意する。

命日の日、佳奈は向かいのアパートの京子を訪ねる。共に覚悟を決めた女同士の対決。だが佳奈にはある切り札によって京子に勝つ自信があった。事実京子は佳奈の迫力に負け、

桑田の殺害を断念せざるを得なくなる。

殺害を思いとどまった京子を斉木は優しく迎える。だが妻子を裏切る事はできない。それは斉木も京子もわかつていた。京子は未来の希望に賭け、一人徐々に前を向いて生きて行く事を決意する。

そんな京子が驚愕の事実を知る。斉木の妻子は一年以上前に何者かによって無惨に殺されていた。幸福に生きるためにつらい記憶を封印してしまう人間がいると、斉木がカウンセリング中に話していた。それは斉木自身のことだった。家でベビーベッドに寝ている人形相手に話している斉木は完全に精神が崩壊していた。京子は考える。嘘の中で幸せに生きるのと、悲惨な現実を知る事はどちらが彼のためになるのか……。考えた末、京子は斉木に現実を知らせ立ち直らせることを決意する。それが本当に正しいことかという疑問を抱きつつ……。

斉木は京子の尽力により現実に引き戻される。二人は結ばれるが、それは残酷な結末への第一歩だった。

以上

## 登場人物

柴田京子 (32)	息子を殺された母親
斉木洋介 (33)	カウンセラー
桑田秀夫 (40)	雄馬を死なせた元教師
桑田佳奈 (38)	桑田の妻
斉木美鈴 (29)	斉木の妻
斉木拓海 (6ヶ月)	斉木の息子
根津貴文 (36)	京子の元夫
柴田雄馬 (9)	死亡した京子の息子
倉元和明 (35)	被害者遺族
佐山藤子 (43)	被害者遺族
前園 (46)	京子のパート仲間
小田 (43)	京子のパート仲間
秋本 (50)	刑事
田沢 (38)	刑事

### □ある家・リビング（夜）

家具などが乱れている。

机の下には割れた皿と飛び散った食物。カーペットに所々ついている血の染み。部屋の隅から血だまりが広がっている。隅に見える血だらけの男の体。

腹が真っ赤に染まっている。

女の声「人は言う。死んだ人間は返ってこないのに復讐に何の意味があるのかと」

### □丘の上

月明かりだけの暗闇に一人立っている女の背。

下に見える黒い海の波音が聞こえる。

女の声「でも大切な人を失った人間はわかる。死んだ者のためなんかじゃない。憎むべき相手が生きていることが許せないという感情。ただただ自分の怒りを爆発させたいという欲求。刃物を人間の体に突き刺すなんて、普通の感覚でできることじゃない。でも憎しみはそれを可能にする」

### □ある家・リビング

床に転がった血に染まった包丁。

隅に転がっている死体。

鑑識や検死官が作業している。

刑事・秋本(50)と部下の田沢(38)がいる。

秋本「奥さんは助かりそうなのか？」

田沢「わかりません」

リビングから玄関までの廊下に、血のついた足跡が続いている。

秋本たちがその足跡を気にする。

### □警察署・取調室

秋本と向かい合って座っている柴田京子

(32)、沈んだ目をしている。

秋本がタバコを取り出して口にくわえる。

秋本「あんた吸う？」

首をふる京子。

秋本「つらかっただろうね、この一年」

京子がフツと微笑む。

秋本「俺は刑事だけど、あんたらの気持ちわかるよ。いや刑事だからこそ尚更かな。愛する人失って絶望に陥る遺族の人達何人も見て来たからね。だけどそれでも復讐ってのは許すわけにはいかんのよ。それを許したら社会なんて成り立たないんだ」

京子が歯を見せて笑う。

秋本「何がおかしいの？」

京子「センセイにも同じこと言われました」

秋本「名前何てつけたっけ？その先生」

京子「斉木さん」

秋本「警察の俺が言うのも何だが、あんま信用できねえけどな、カウンセラーなんて。人の愚痴聞いて金もらってるような奴らだろ」  
京子「私も最初そう思っていました。でもセンセイは優秀でした」

秋本「優秀ね。十日間カウンセリング受けた結果がこれだってんじやあ何とも言えんね」

暫しの間。

京子「刑事さん、現実逃避って信じます？」

秋本「俺もこんな世の中から逃避したいよ」  
京子「そういうんじゃないやなくて、本当につらい現実を忘れちゃうんです。そんな事実がなかったかのように。私会ったんですよ、そういう女性に。最初、少しうらやましいと思っただ。日々がつらすぎるなら楽になりたい。自殺だってそうですよ。向き合わなければ楽になる。でもね、よくよく考えて、自分がそうだったらって考えたら恐ろしくなった。だって：殺せないじゃないですか、憎む相手を」

秋本がやれやれと首を振る。

秋本「斉木先生と会ったのは××のバーだったね」

京子「ええ」

秋本「初対面であんたその先生を張り手打ちして、なんでまた訪ねて行ったの？」

京子「：わかりません」

秋本「本当は：助けてほしかったんじゃない

の？誰かに」

京子「わかりません：」

秋本「そのカウンセリングで、復讐をやめようとか、迷いは生じなかった？」

京子がゆっくりと首を振る。

京子「愛する者を失い復讐を決意し、愛する者を見つけ復讐をやめる。そんなの卑怯じゃないですか」

京子の悲しげな顔。

京子の声「憎しみは何でも可能にする。そう思っていた。：私は弱い人間でした。ごめんさいね、センセイ」

#### □カウンセリングセンター・会議室

「被害者遺族の会○○」の貼り紙。

円になって座っている老若男女の被害者遺族。

その中の一人・倉元和明（38）が話している。

倉元「今でもまだ、家に帰れば2人が待っているような気がして……。気を紛らわせるために仕事に打ち込んで、私生活でも他の女性を誘ったりしてるんですが……。昨日、警察の人が来て進展状況を報告してくれたんですが、犯人の目星はつけられないみたいで……。どこに怒りをぶつけられないのか……。とにかく、前向きにやるしかないと思っています」

皆が拍手をする。

唯一拍手をせず暗い目で周りを見ている

柴田京子。

進行「倉元さん、ありがとうございます。ではお隣、本月初参加の柴田さんです」

皆の視線が京子に注がれる。

京子はうつむいてしまい何も話さない。

戸惑い気味に場を取り繕う進行係。

進行「では：次の方」

次の人が話を始めるが、京子はうつむいたまま。

その顔に不気味な笑みが浮かぶ。

□バー(夜)

ウイスキーを飲んでいる京子。

灰皿にはタバコの吸い殻が一杯に。

吸っていたタバコをもみ消してさらに新しい一本に火をつける。

突然テーブルにグラスが出される。

京子「？」

バーテン「あちらの方からです」

バーテンの示した方向を見ると若い男が座っている。

京子は一瞥すると顔を背ける。

男が近づいてくる。

隣に座る男・斉木洋介(33)。

京子は無視するように飲んでいる。

斉木「こんな風に飲んでたら夕チの悪いのに声かけられるでしょう」

京子はタバコを消すと帰り支度始める。

代金をバーテンに渡そうとする。

バーテン「先ほどこちらの方が…」

斉木を睨みつける京子。

京子「無駄な出費ね」

斉木「読心術って知ってます？」

京子「は？」

斉木「相手の心を読む能力。あなたが今考えてることを当てたら僕に付き合ってもらえませんか」

京子「笑わせないで」

斉木「10分だけでいいですから」

京子「こんな下手なナンパ初めて」

斉木「当たっても違うと言えばいい。何も損しないでしょう」

笑う京子。

斉木「はずしたら消えますよ」

京子「やってみたら？」

斉木「…誰を殺すんです？」

京子の笑みが消えて表情が固まる。

唾を飲み込む喉元が動く。

斉木「否定できないみたいですね。柴田京子さん」

京子「あんた誰？」

斉木「約束ですよ。10分だけ」

渋々座る京子にグラスを近づける斉木。

斉木「人を殺した人間の目ってね、赤いんですよ。そして殺人を企む人間の目は何重にも塗りつぶしたように黒い。信じます？」

京子「…」

斉木「でもその相手が誰なのかはわからない。他人なのか、それとも…あなた自身なのか」

京子「あんた誰なの？」

斉木「カウンセセラーの斉木と言います」

京子「カウンセラー？」

斉木が懐から名刺を取り出し渡す。

斉木「さっきセンターで会ってるんですけど気付いてませんか？遺族の会で」

京子「…」

斉木「後を尾けました」

京子「なぜ？」

斉木「嫌な予感がしたんです。家に帰って首を括るか、包丁を持って誰かの元に向かうのか…。そしたらここでウイスキーを5杯飲んでタバコを灰にし続けている。そうすると自殺の方が可能性高いかと思ったけど、さっきの反応でそうでもないのかと思って」

タバコに火をつける京子。

京子「で、説教でもしに来たってわけ」

斉木「カウンセリングでも受けませんか？」

笑い出す京子。

笑いが止まらない京子を黙って見ている

斉木。

他の客が奇異の目で二人を見る。

斉木「柴田雄馬君9歳。2011年×月×日死亡。死因、脳内出血」

京子の笑いが止まる。

斉木「脳内出血は担任教師による体罰が原因だと主張するも学校も警察も認めず。出血が外傷によるものかの確証は得られず病死として処理される。一人息子だ。つらかったでしょうね」

斉木を睨んでいる京子。

斉木「殺す相手はこの担任教師ですか？それ

とも自分？それとも…両方？」

無言で斉木の目をじっと見ている京子。

斉木「いずれにしてもバカな選択だ。死んだ雄馬くんが泣いてますよ」

京子、斉木の頬を叩く。

#### □墓地（日替わり）

雄馬の墓の前に立っている京子。

コートポケットからタバコの箱を取り出すと、丸められた紙が地面に落ちる。

拾って広げると、斉木の名刺。

京子「…」

#### □斉木クリニック・表

看板に『心療内科』の文字。

名刺を手に行っている京子が建物を見上げている。

一度去りかけるが、立ち止まり迷う。

#### □同・カウンセリングルーム

デスクのイスに座っている斉木、ルービックキューブをいじっている。

ノックと共にゆっくりとドアが開き、京子の顔が覗く。

斉木「どうぞ」

恐る恐る入って来る京子。

京子「昨日はすみませんでした」

斉木がはいえと微笑んでソファへ促す。

京子「それだけ言いに来たので…」

斉木「そうですか」

斉木は気に留めない様子でキューブをいじる。

京子は迷いつつソファに座る。

斉木はずっとキューブをいじっている。

部屋を見回す京子。

自分の座っている上品なソファセット。

隅にコーヒーマーカーとお菓子が並ぶ。

花瓶に生けられた花や観葉植物が多数。

壁には自然風景の絵や写真が飾られ、棚には動物の人形などが置かれている。

大きく引き延ばされた一枚の写真が白い壁に印象的に飾られている。

写真―高所から海を見下ろすような場所。手前の青々とした植物が模様のように茂っている。

斉木の事務机の上には斉木の家族写真。

斉木と妻、そして抱かれている赤ん坊。

キューブに目を落としている斉木。

京子も何も話さず、長い沈黙が流れる。

コーヒー豆が挽かれる音が鳴り、京子がびくつと顔を上げる。

マシーンから落ちるコーヒー。

斉木がカップを持って京子の前のテーブルに置く。

京子が小さく頭を下げる。

斉木は再び自分のイスに座り、キューブをいじる。

一面の色が揃い、次の面を揃えようとしている。

再び二人の間に流れる沈黙。

タバコを取り出し、斉木をチラチラと見ながら火を点ける京子。

斉木は何も言わない。

京子は気まずそうにカップを口につける。カレンダーに目をやる京子。

長い沈黙が破られる。

京子「もうすぐ一周忌なんですよ」

斉木の手が止まり、キューブを机に置く。

京子「息子の…雄馬の」

同じくカレンダーを見る斉木。

斉木「あと十日ですか」

京子はうなずきながら再び部屋を見回す。

京子「なんか意外ですね。もっと事務的なトコかと思ってた」

斉木「場所によって全然違いますけどね。居心地のいいトコの方が患者さんも話しやすいでしょう」

京子「患者…ね。どうやって洗脳するんです？ここで」

斉木「…」

京子「（笑う）どんなアドバイスするんです？カウンセラーって」

斉木「アドバイスはしませんよ。我々は患者と想いを共有して患者が自力で安定するように手助けするんです」

京子「共有ね」

斉木「なぜ来たんです？」

京子「え？」

斉木「なぜ来たんです？ここに」

京子「そうですね…。普通来ないですよ。わからないですよ、自分でも」

斉木「素直に怒りをぶつけて来たので希望があると思いました」

京子「え？」

斉木「昨日の晩。無礼なことを言った僕を殴ったでしょう。一番恐いのは感情が欠如した人間。喜怒哀楽って人格を構成する上で絶対必要なものなんです」

京子「試したんですか？」

斉木「どう感じました？雄馬くんが亡くなった時」

京子の表情が変わる。

斉木「悲しみ？怒り？」

京子「悲しみ…そして怒り…かな」

斉木「憎む対象ができたから？」

うなづく京子。

斉木「息子を殺した教師…を殺す母親」

京子が鋭く斉木を見る。

斉木「止めてあげましょうか」

京子「は？」

斉木「誰かに止めてほしくてここに来たんですよ。実際に殺しなんてできるわけないですからね」

京子「…ナメないでよ」

斉木が肩をすくめる。

テーブルの上のカップを手取る京子。

京子「また怒らせる気？今度はヤケドするよ」

斉木は奇妙な笑みを浮かべている。

京子「ごちそうさまでした」

京子が帰りかける。

斉木「僕に時間をくれませんか。今度は十日間。カウンセリングして、あなたを説得できたら僕の勝ち。気が変わらず殺したらあなたの勝ち」

京子「（笑って）」

斉木「今度はこれで決めます？」

ピンと硬貨を弾く斉木。

京子「また読心術に挑戦したら？」

言いながら京子の視線が一瞬壁の写真に動く。

斉木は京子の目を見たまま二回三回と硬貨を宙に飛ばす。

斉木「この写真の美しい場所はどこだろう」

京子はニツと笑うと、指で銃を作り、自分の頭を打つマネをする。

### □夜空の実景

黒い空に光る月。

### □斉木家・リビング（夜）

ソファに座り考えこんでいる斉木。

妻の美鈴(29)が、生後6ヶ月の拓海を抱きながらリビングに来る。

美鈴「どうしたの？悩み事？」

斉木「うん、ちょっと」

美鈴「もう、仕事を家に持ち込まないでよ。職業柄考え込んでんじやうのはわかるけど」

美鈴は拓海をベビーベッドに寝かせてあやす。

不機嫌な拓海が泣きそうになっている。

美鈴「わ、泣きそう泣きそう」

斉木が来て上から覗く。

人差し指で拓海の頬を触ると、拓海が手で押しのける。

美鈴「（笑う）嫌がられてるんじゃない？」

斉木「うーん」

美鈴「早く寝てねえ。お母さんを寝させてくれ」

さらに泣き出す拓海。

美鈴「はいはい。ほらお気に入りのメリーだよ」

ベビーベッドにつけられたオルゴールメリーが拓海の上で回っている。  
微笑んでその様子を見ている斉木。

#### □小学校校庭（回想）

教師・桑田秀夫(40)に並ばされている男子生徒数名。

その中に柴田雄馬(6)がいる。

桑田「お前ら走ってる時におしゃべりしてんじゃねえよ。真面目にやる気ないなら1時間ずっと走らせるぞ」

一人の男児が頭を押さえている。

桑田「なんだ北川、仮病で休もうとしてるのか」

雄馬「北川は今日頭痛いって言ってたんだよ。だからみんな心配して話しかけてただけじゃん」

桑田、雄馬に近づくと拳で頭を殴る。

桑田「お前先生にその口の利き方はなんだ」

頭を押さえてうづくまる雄馬。

× ×

生徒たちが罰で走らされている。

頭を押さえ具合が悪そうな雄馬。

桑田の怒鳴り声が聞こえている。

#### □京子のマンション・リビング（回想）

パートに出かける支度をしている京子。

雄馬「ただいま」

帰って来た雄馬、顔色が悪い。

京子「どうしたの？」

雄馬「ちよつと頭が痛くて」

雄馬の額に手をあてて熱を計る京子。

京子「熱はないみたいね。頭痛薬飲んで横になってなさい。お母さんパートに行かなきゃいけないから、お父さんに早く帰るようメールしとく」

雄馬「うん…」

京子「じゃあ遅れちゃうから行くね」

閉まるドア。  
一人残される雄馬。

### □同・雄馬の部屋（回想）

ベッドの中、頭を押さえてのたうち回る雄馬。

京子の声「その晩に意識不明になった雄馬は、病院に運ばれてすぐに息を引き取りました」

### □斉木クリニック・カウンセリングルーム

向かい合ってソファに座っている斉木と京子。

京子は立て続けにタバコを吸っている。

京子「他の生徒から、雄馬が授業中に殴られたって聞いて、それが原因かもしれないって。それで抗議に行ったんですけど適当にあしらわれて：その内、面会も断られて：。桑田は行き過ぎた指導があったと3ヶ月の停職処分を課したって：笑っちゃうわね」

斉木、じつと耳を傾けている。

京子「すぐに病院に連れて行けばよかった。そしたら多分助かったよね：」

斉木「：」

京子「私のせいだ私のせいだって、口癖のようになっちゃってしまっって、夫はそれに嫌気がさして、半年前に出て行った」

斉木「：」

京子「あの教師のせいで家庭は崩壊：パート先でも変な目で見られて：。センセイ、今の私ってそんなに変かな」

何も言わない斉木

京子「変なのはこの世の中よ。人の子供を殺した男が何の罰も受けずにのうのうと生きているなんて：」

斉木「その桑田っていう教師は反省しているんですか」

京子「してたら何なんです？」

斉木「：」

京子「毎日ビール片手に反省してるみたいですよ。パチンコしながら」

斉木「パチンコ？」

京子「…家まで言って話聞こうとしたんだけど、駅前で見かけたんですよ。ヘラヘラ笑いながらビール片手にパチンコ屋から出てくるのを。その姿見たら目の前が真っ赤になっちゃった…。その時決意したの」

斉木「殺す事を？」

京子「（うなづく）…警察に言います？」

斉木「基本的にカウンセリング中の会話に関しては守秘義務があるんですが、自害他害の恐れがあり、それが具体性を持っている場合、あなたに事前通告した上で、警察に報告することもあります。ただ…」

京子「？」

斉木「あなたがここにいる理由は無意識下のSOSだと思う」

京子「じゃあ止めてみたら？」

斉木「…」

京子、立ち上がると飾ってある斉木の家  
族写真の前に行く。

京子「4ヶ月くらい？」

斉木「5ヶ月と17日」

京子「名前は？」

斉木「拓海」

京子「嫌な夢ってあるじゃない。こんな事が本当に起きるはずがない、夢なら覚めてくれて思ってたら本当に目が覚めて安心すること、あるでしょ。…でもね、覚めないのよ私は」

写真の拓海の顔を指でなぞる京子。

京子「センセイが同じ目にあったらどうする？」

斉木「…」

ソファに戻りタバコに火を点ける京子。

京子「私がここにいる理由はね…遺書みたいなものよ」

斉木「遺書？」

京子「私が刑務所に行こうが地獄に行こうが、ここでの会話は記録に残るでしょ。私がどうして殺人を犯すに至ったか…センセイ、ちや

んと証言してね」  
齊木「……」

### □スーパーマーケット(夜)

レジで客対応している京子。

カゴを置く男性客と目が合うと京子の表情が変わる。

男・根津貴文(35)が目で挨拶する。

無言のまま会計を済ます京子。

貴文「外で待ってる」

そう言っ出て行く貴文。

### □同・事務室

パートの前園(46)・小田(43)がシフト表を見ながら話している。

前園「困ったわー来月の○日、息子の授業参観だったの忘れてシフト入れちゃったのよ」

小田「私もその日はPTAだから、代われないわ」

前園「誰か代わってくれないかしら。あ、柴田さんが夜入ってるから交代してもらえるかな。あの人なら……ね」

若干開いているドア外に人の気配。

ドアが開き京子が入って来る。

前園「(慌てて)あ、お疲れ様です」

京子「……お疲れ様です」

焦る二人を無視して帰り支度をする。

### □病院(回想)

ロビーにうつむいて座っている京子と夫の貴文。

貴文が京子の様子を気にする。

手を膝の上で組んで祈るように唇を動かしている京子。

医師が近づいて来るのに気付き立ち上がる二人。

暫し医師の話を聞くと、京子が膝から崩れ落ちる。

泣き叫ぶ京子を支えて抱きしめる貴文。

□通夜会場（回想）

雄馬の遺影に焼香する参列者たち。

正座している京子と貴文。

そこに来た桑田秀夫とその妻・佳奈(㊦)。回りの目を気にしながら会場に入ろうとする。

京子が二人に気付き、怒りの表情で来る。

京子「よく来れたわね。帰ってよ！」

佳奈「あの…ご焼香だけでも」

京子「あんたが殺したあの子を見て焼香なんてできるの？帰れって言ってるのよ！」

響き渡る怒鳴り声に周りの人間がざわついている。

貴文「京子、大きな声出すな」

桑田は京子と目を合わさず足早に立ち去ってしまう。

佳奈も京子にお辞儀をして桑田を追いかける。

京子は怒りで震えている。

突然貴文の手をふりほどき、走り出す。

貴文「おい！」

佳奈に追いつく京子。

京子「奥さん！」

ふり返る佳奈。

京子、桑田の遠ざかる後ろ姿を見ながら。

京子「この憎しみをおさえるように努力する。

あなたの態度に免じて努力してみるけど」

血走った京子の目に恐怖を感じる佳奈。

京子「もし無理だったら…ごめんなさいね」

佳奈「…！」

貴文「よさないか」

貴文に引っぱられるように戻る京子。

佳奈の表情―。

□京子のマンション（回想）

パソコンで雄馬の動画を繰り返し再生している京子。

隣の部屋で一人、出来合いの夕食を食べている貴文。

×

×

日替わり。

仕事から帰って来る貴文。

京子が慌てた様子で来る。

京子「ねえ、パソコンの動画が全部なくなってるんだけど」

無視するように部屋に行き着替える貴文。

京子「ねえ！雄馬の動画も全部！」

貴文「消したんだよ！一日中そんなもん見て何になるんだ！いい加減にしてくれよ！」

京子「消した……？」

突然貴文につかみかかる京子。

貴文「京子、よせって！」

京子「何でよ！何てことすんの！」

京子の腕を掴み、力強く押し返す貴文。

京子は床に尻餅をつく。

貴文「（息を整えながら）消してないよ。ハードディスクに移して隠しただけだ。京子が落ち着いたら……いつか、見れるようにするよ」

京子「……見せてよ」

貴文「……」

京子「今見せてよ……。もうそこにしか雄馬はいないんだよ。もうそこでしか笑ってくれないの」

貴文「いい加減にしろ！こっちはそんなこと言い訳に仕事で手抜けないんだよ！雄馬がいようがいまいが会社の連中にそんなこと関係ない！仕事のストレスだけで手一杯なのに家でお前が……」

京子が涙あふれた目で貴文を見ている。

貴文は顔をそむけて着替えを続ける。

ふり返ると京子はリビングのソファに座っている。

後ろ姿から立ち上る煙。

貴文「タバコか？いつから……」

京子は無視して吸い続けている。

貴文「悪かった」

京子「正哉くん……覚えてる？」

貴文「え？」

京子「正哉くん」

貴文「…」

京子「忘れるわけないよね。私が一回だけ浮気した相手だもの。私はあなたと別れたつもりだったから、浮気だと思っただけだよね」

貴文「何でそんな話を今…」

京子「結局私はあなたを選んで、結婚して子供を産んだ。あなたが私を愛してくれたのはわかっている。そういうのは伝わるものよ。でも、その一点…。私が浮気した事、一時だけど二股かけてた事…。その事だけは、私を許してない。正哉くんも、もし道でバツタリ会ったら、殴りたいんじゃないの？」

貴文「…」

京子「何が言いたいのかって？怒りは、持続するの。悲しみは徐々に薄れても、それと反対に怒りは膨らんでいくの。雄馬が死んだ事は…殺された事は、私にとって『こんなこと』で片付けられない」

貴文「…」

京子「別れよう。雄馬が生まれて私たちは両親になったけど、雄馬を失ったら、もう夫婦には戻れない」

立ち尽くしている貴文。

### □スーパーマーケット・表（現在）

京子が出て来てタバコに火を点ける。

声をかける貴文。

### □住宅街・道

並んで歩いている京子と貴文。

貴文「元気か？」

京子「…」

貴文「ちよつと顔が見たくなつてさ」

京子「無理して買物しなくてもいいよ」

貴文「ああ…もうすぐ雄馬の命日だろ。一緒に墓参りしないか」

京子「そうね」

タバコを携帯灰皿に押し込み、さらに一本取り出す。

くわえたタバコを奪う貴文。

貴文「吸い過ぎだよ。いつからこんなに吸うようになった？」

京子「…」

貴文「余計なお世話だけど、京子、新しい男を見つけた方がいいんじゃないか」

京子「は？」

貴文「京子なら、いくらでもいるだろ」

京子「…すぐに彼女作った人は余裕ね」

貴文「いや、そういう訳じゃ…」

京子「早く帰ってあげれば？元妻と会ってるって知ったら彼女怒るよ」

貴文「ちよっと話があったんだよ」

京子「何？」

貴文「その、今付き合ってる人がさ…」

京子「何よ」

貴文「実は…妊娠したんだ」

京子、驚きを隠せない。

貴文「今3ヶ月でさ…」

京子「…それで？」

貴文「いや、言っておいた方がいいかと思っ  
て」

京子「私に何の関係があるの？」

貴文「雄馬のことは、忘れるとは言わないけど…京子も前に進まないよ。また子供持つ可能性だって…」

京子「（睨む）…」

貴文「いや、ごめん…」

京子「…頭の中で小型爆弾が爆発するんだって」

貴文「え？」

京子「脳内出血ってそんな痛みなんだって。

苦しみは一瞬だったのかもしれないけど…雄馬には永遠に感じられたかもしれない」

貴文「よせよ」

京子「なんでお母さんはパートに行っちゃったのか。なんでお父さんは早く帰って来てくれないのか。そう思いながら一人で死んでいったあの子に…何も感じず前に進めって言うの？」

貴文「…」  
京子「私には：前なんてない」  
タバコに火を点けると、何も言えない貴文を残し去る。

#### □テレビ画面

校門から出てくる教師・桑田をカメラが追う。

鬱陶しそうに歩く桑田に記者が質問を浴びせる。

記者「先生すみません、雄馬くんが死亡した件でお話を伺いたいんですが」

無視して歩く桑田。

記者「授業中に雄馬くんを殴ったのは本当なんでしょうか？」

桑田「…ええ」

記者「事実なんですね」

桑田「指導の一環です。脳に影響を与えるような叩き方はしていません」

記者「でもそれが原因かもしれないですね」

桑田「体罰自体が許されないのであれば、その点は反省しています」

記者「体罰が脳内出血の原因だとは思いませんか？」

桑田「…」

記者「亡くなった雄馬くんやご遺族に何か言いたい事は？」

桑田「残念です」

去って行く桑田。

場面が巻き戻り、桑田の顔のアップで一時停止する。

#### □斉木家・リビング

そのテレビを見ている斉木。

ベビーベッドでは拓海が寝ている。

美鈴が帰ってくる。

美鈴「ただいま。何これ？」

斉木「報道の知り合いから借りてきた。結局ニュースでは使われなかったんだけど」  
頭に戻して再び再生する。

美鈴「（見て）本当に体罰が原因なの？」  
斉木「殴られた場所と脳内出血の箇所は同じ。  
多分そうだろうな」

美鈴「今の患者さんと関係あるの？」

斉木「まあね」

美鈴「親がこれ見たら気がおかしくなるでし  
ょうね」

斉木「うん」

美鈴「まだ教師やってるの？この人」

斉木「いや、半年くらい前に退職したらし  
い」

斉木が立って台所へ。

拓海が目を覚まして泣き出す。

美鈴「あら起きちゃった。どうしたの？」

拓海を抱いてあやす美鈴。

斉木「飲む？」

美鈴「食事の時でいいよ」

斉木「美鈴が一昨日作った離乳食もうなかつ  
たっけ」

美鈴「少し残ってたと思うけど。冷凍庫にな  
い？」

二人を見る斉木。

京子の声「センチが同じ目にあつたらどう  
する？」

斉木「…」

□ボロアパート・表々中

錆びた外階段を上がってくる京子。

一室のドアを開けるときしんだ音が鳴る。

六畳ほどの室内には家具も何もない。

隅に新聞紙が敷かれ、双眼鏡、スタンガ  
ン、包丁などが並べられている。

京子は窓辺に座ると双眼鏡を覗く。

向かいに見える一軒家の電気は消えてい  
る。

しばらく暗い部屋に一人佇んでいると、

向かいの一軒家に夫婦が帰ってくる。

後ろ姿を双眼鏡で見ている京子。

家に入る際に二人の顔が見える。

桑田とその妻・佳奈。

室内に姿が消えても暗い目で窓外を見ている京子。

### □イメージ

主観映像。

ドアが勢いよく開かれ驚く佳奈。

佳奈を押しつけ勢いよく中に入っていく。

リビングの食卓にいる桑田が驚いて立ち上がる。

恐怖の表情で後退する桑田を追いかける。

「待て！」と叫ぶ桑田に勢いよくぶつか

### □ボロアパート・一室

うつろな目で窓外を見ている京子。

### □カウンセリングセンター・会議室

被害者遺族たちの中に京子の姿。

円から外れて座っている斉木と目が合う。

参加者の一人、佐山藤子(43)が戸惑い気味に話し始める。

藤子「主人が亡くなった場所に今日も行って来たんです。献花台があつて沢山花が……。娘は主人と……。いえ、娘と一緒に主人が好きだった公園によく散歩に行くんです。今日もそこを歩いて一緒に帰ろうって話してるんですけど、でも時々あの子来なくなつて……」

話途中で泣き崩れてしまい、支えられて退出する。

### □斉木クリニック・カウンセリングルーム

座っている斉木と京子。

京子「あの人、変なの。言ってる事が支離滅裂で」

斉木「少し前に、秋葉原で5人が殺された通り魔事件、覚えてますか？」

京子「もちろん」

斉木「亡くなった5人のうちの2人が、あの佐山さんのご主人と娘さんです」

京子「え……」

斉木「喪失の悲しみを受け入れられなくて、少なくとも娘が生きていたらという願望が現実化してしまっているんです」

京子「願望が現実化？」

斉木「よくあるとは言わないけど、事件直後にたまに見る症状だね。あまりにもつらい出来事が起きると、幸福に生きるためにつらい記憶は封印してしまう、精神安定のために脳がそういう働きをする事があるらしい。現実逃避と似たようなものかな。抑圧された記憶と、一部の心理学者は呼んでいる」

京子「抑圧された記憶？」

斉木「あの人にとって、娘の想像が生きる支えになっているんでしょう。強引に現実を知らせてしまったら、おかしくなってしまうかもしれない」

京子「知らない方が…幸福ってこと」

斉木「（うなづく）」

京子「…私はごめんだな」

タバコに火を点ける京子。

京子「センセイって宗教信じる？」

斉木「いや」

京子「雄馬が病院に運ばれて手術室に入った後、夫と待ってたんですよ。その間、ずっと祈ってた。神がいるなら助けてくれって。この世を司る神が存在するなら、こんな理不尽なことが起きるはずがない…。でも起きちゃった。わかったんですよ。もう私たちは見放された世の中に生きてるんだって。神の裁きなんか期待できるはずがないって」

斉木「…」

京子「私ってイカレてると思う？」

斉木「殺人を企むくらいだからね」

京子「（微笑んで）」

5時を指す時計。

斉木「時間です」

京子「…」

京子が立ち上がりドアに向かう。

ドアノブに手をかけるが、何かを思い出したようにふり返る。

京子「ねえセンセイ……」

### □住宅街・道（夜）

ふり返った京子、誰もいない夜道に立っている。

京子「！」

状況が把握できず辺りを見回す。

ある一軒家の前にいる事に気づく。

その表札「桑田」――。

玄関の中から聞こえる声にハッとすると京子。

佳奈の声「あなた今日新聞取ってなかったの？」

その声と共にドアが開く。

身を隠し、逃げるように走り出す京子。

佳奈は遠ざかる足音に気付くが、新聞を取り中に戻る。

### □ボロアパート・中

京子が走り込んでくる。

激しく息切れし、記憶を辿るように頭に手をやる。

窓外から桑田の家を見ると中に動く人影。

やがて室内の電気が消える。

京子が腕時計を見ると0時近くを指している。

頬を伝う汗をぬぐう京子。

### □墓地（日替わり）

雄馬の墓の前にしゃがみ込んでいる京子。身に覚えのない花が供えられている。

首を傾げる京子。

タバコを吸いながら雄馬との思い出に浸り、しばらく座っている。

×

フラッシュ。

年齢別の雄馬のカットが重なる。

×

墓地を後にしようとする京子。

別の入口から花を持って入ってくる女が

見える。

桑田佳奈が雄馬の墓前で止まり、丁寧に花を供え、手を合わせる。その様子を京子が隠れて見ている。

#### □ 斉木クリニック・カウンセリングルーム

一人で部屋にいる斉木が時間を気にしている。  
誰も現れないドアを見る。

#### □ 墓地

再び雄馬の墓前にいる京子。  
タバコに火を点け、ライターを花に近づける。  
あぶられて焦げる花びら。

#### □ バー(夜)

一人飲んでいる京子。  
別のテーブル席の男3人組が京子を見て話している。

やがてその内の一人が立ち近づいて来る。  
男「誰か待ってるの？」

京子「(無視) …」

男「よかったら一杯おごらせてくれない？」  
奥でニヤニヤしている2人を見る京子。

京子「ジャンケンで負けたの？それとも勝ったの？」

男「え？」

京子「いずれにしろ群れてる男はお断りなの」

男「そう突っ張らないでよ。(バーテンに) 注いで」

バーテンが京子と男のグラスを満たす。

男「何やってる人？OL？風俗？」

京子がフツと笑う。

男「デートクラブ専属の人妻とか？」

京子の笑みが消えて男を睨む。

男「あら凶星？大丈夫、俺何でもオツケーだから。欲求不満なの？育児疲れで家飛び出してきたとか」

京子がグラスを持ち上げて乾杯を誘う。  
男が笑ってグラスを近づける。

次の瞬間グラスを男の顔面に叩き付ける。

男「ぐあっ……！」

割れたグラスで切った顔を押さえる男。

京子「手から流れる血を舐めている。」

京子「消えろっつってんのよ」

京子の迫力に怖じ気づく男たち。

□ 齊木クリニック・カウンセリングルーム

窓辺でタバコを吸っている京子。

イスに座っている齊木。

齊木「昨日はどうしたんです？」

京子「雄馬の墓参りに」

京子がエスプレッソマシンのボタンを  
押す。

京子「ここお酒があれば完璧なんだけどな」

齊木「残念ですが」

京子「一昨日：私何時にここを出ました？」

齊木「5時くらいかな」

京子「私、普通でした？」

齊木「え？」

京子「覚えてないの、ここを出た事もその後  
の事も。気づいたら夜道に立ってた」

齊木「家の近く？」

京子「……（うなづく）私けっこうおかしくな  
ってます？」

齊木「そんなに心配する必要はありませんよ。  
歩きながら考え事をしていて、家を通り過ぎ  
てしまうとかは誰にでもあるでしょう。過度  
のストレスで一部の記憶が飛んでいるだけだ  
けです」

京子「そうですか、……残念」

齊木「……？」

京子「おかしいくらいじゃないと、人なんて  
殺せないでしょ」

齊木「……」

京子「私アル中かな。お酒が欲しくてたまら  
ない。雄馬がいた頃はこんなことなかったの  
に。あの頃は何も考えず主婦やってた。毎日

夫と雄馬の朝ご飯作って見送って、家の掃除して洗濯して買い物して、近所のお母さんたちとおしゃべりして……。若い頃はそんな人生は嫌だっと思ってたけど、見事に平凡な家庭を持つて平凡な母親になつて……。でも私ね、けっこういい母親だったんですよ。信じられない？」

斉木「信じますよ」

京子「楽しかったな……」

京子の目がうつすらと濡れる。

斉木「飲みに行きます？」

京子「え？」

### □ジャズバー（夜）

店内に流れるジャズ。

真ん中のホールでは、カップルが踊っている。

店の一角に座っている斉木と京子。

斉木「よく来るんですか？ここ」

京子「若い頃にね。最近は全然」

京子がグラスを空け、斉木も続く。

京子「けっこう飲んだ」

斉木「柴田さんには負けるけど」

京子「どうしてカウンセラーになつたの？」

斉木「大学で心理学を専攻して、興味を持って臨床心理士の資格を取つたんです」

京子「それだけ？」

斉木「その頃、当時付き合っていた彼女が妊娠した。若かつたけど、結婚もしようと……思つた」

京子「しなかつたの？」

斉木「社会で凶悪犯罪が増えていた頃だった。未成年によるリンチ殺人、猟奇殺人、虐待死、なんであんな大人しい子がこんなことをつていうような残酷な事件が……。そういう事件を目にする度に僕の中で、子供を持つことに小さい疑問が生まれた。自分の子供がこういう事件の被害者や加害者になつたら……。子供が欲しいという理由で生んでいいのか……。親の自分は責任を取れるのか……。若かつたの

もあると思うけど……そんな疑問を持っている内に、彼女は流産してしまった」

京子「……」

斉木「自分の迷いがお腹の子に伝わったんじゃないかって悩んだ。彼女とも別れて、そんなことを考えなきゃいけないこの世の中が嫌になった。心が不安定な人間が多すぎるから、自分が少しでもそんな人達のサポートができればと思っ、この仕事についた」

京子「……」

斉木「この話は、今の妻にもしていない」

京子「でも結局子供持ったんだ。欲しくなかったの？」

斉木「今の妻と出会って拓海が生まれた時、人生の意味がわかった気がした。何よりも大切に思える存在が本当にあるんだって……」

京子の表情を汲み話をやめる斉木。

斉木「ごめん」

京子「意外にしゃべるんですね。奥さん名前なんて言うの？」

斉木「美鈴」

京子「美鈴さん……幸せ者ね。愛されて」

京子の表情が寂しげになる。

店内に新しい曲が流れ始める。

しばらく耳を傾けている京子、ホールで踊るカップルに目をやる。

京子「センセイ、踊ってくれない？」

斉木「え？」

京子「……お願い」

×

×

ゆるやかな音楽に身を任せるように踊る二人。

京子の顔が斉木の胸に近づく。

京子の目から涙がこぼれる。

涙を隠すように顔を伏せる。

斉木はその様子に気づいている。

京子の背中に手をやりそつと抱き寄せる。

声を出さず泣き続ける京子を優しく包む。

音楽に合わせ、2人の時間がゆっくりと流れる。

□ 齊木家・中

齊木が帰って来て寝室のドアを開ける。  
寝ている美鈴と拓海。  
ドアを静かに閉めてリビングへ。  
暗い部屋の電気もつけずにソファに腰掛  
け、宙を見上げるように背もたれに寄り  
かかる。

□ ボロアパート・中

暗い部屋に佇んでいる京子。  
窓外に見える桑田家は電気が消えている。  
携帯電話が鳴る。  
着信表示の「貴文」を確認し通話ボタン  
を押す。

京子「もしもし」

貴文の声「俺だけど…」

京子「…」

貴文の声「この前は…ごめんな」

京子「何か用？」

貴文の声「どうしてる？元気か」

京子「気になるの？」

貴文の声「そりゃ…まあ」

京子「もう電話しない方がいいでしょ。あな  
たには新しい家庭があるんだから」

貴文の声「京子は…本当に誰とも会ってない  
のか？」

京子「どういう意味？」

貴文の声「だから、つき合ったりしてないの  
かなって」

京子「してるわけないでしょ」

貴文の声「そっか…あの、雄馬の命日なんだ  
けど、どうする？」

京子「…」

貴文の声「京子？」

京子「その日は忙しいから」

貴文の声「忙しいって…」

京子、一方的に電話を切る。

□ 道々小学校・グラウンド前（日替わり）

照りつける太陽。

斉木が携帯で話しながらベビーカーを押している。

ベビーカーの中で寝ている拓海。

斉木「いいよ今日は午後からだから。何か昼ご飯作っておくよ。うん、じゃあとで」

切ると、ベビーカーの日よけを出して拓海を覆う。

ふと周りを見回す斉木。

電信柱の住所を確認すると、何かを探すようにある方向に向かう。

小学生達の声が聞こえて来る。

小学校のグラウンドが見えて来て、斉木は下校の子供たちとすれ違う。

フェンスの外から校内を眺めている男の姿がある。

横顔に見覚えがある斉木は歩く速度を遅める。

スウェットにサンダル、無精髭を生やした男は元教師の桑田秀夫。

桑田に気付き立ち止まる斉木。

桑田は目を細めてグラウンドの子供たちを見ているが、後ろに立つ斉木に気付きふり返る。

桑田「何か？」

斉木「いえ」

斉木は通り過ぎようとするが、再び止まり、探りを入れるように話しかける。

斉木「お子さんがいらっしやるんですか？」

桑田「不審者じゃありませんよ。前にここに勤めていたもんで、ちよつとなつかしくなってますね」

斉木「失礼しました。先生だったんですね。今は他の学校に？」

桑田「いえ、もうやめました」

桑田、ベビーカーを見る。

桑田「まだ小学校には早そうですね」

斉木「ええ、でも妻が教育熱心なもんで、もう色々リサーチしていますよ」

桑田、微笑んでいる。

寂しさと優しさが混じったような目。

桑田「じゃあ」

斉木「どうも」

歩き去る桑田の背を見ている斉木。

#### □桑田家・表

桑田が帰って来て中に入って行く。

#### □同・リビング

桑田が入って来て、台所で料理中の佳奈にビニール袋を渡す。

佳奈「ありがとう。随分遅かったわね」

桑田「ちよつと寄り道してた」

桑田はそう言うと言座って求人情報誌をめくる。

佳奈「小学校？」

桑田「ん…」

後ろから桑田の肩に手をやる佳奈。

その手を取って佳奈を見上げる桑田。

桑田「明日面接行って来るよ」

佳奈「がんばって」

佳奈は台所に戻り料理を再開する。

気になってふり返る佳奈、桑田の背は小

さく寂しい。

佳奈「…」

包丁で野菜を切っている佳奈の目は、何か覚悟を決めたような鋭い目。

#### □斉木クリニック・カウンセリングルーム

斉木が座っている京子にコーヒーを出す。

京子は一口飲むとカレンダーを見やる。

その視線に気づく斉木も見る。

京子はタバコを取り出してくわえようとするが、少し迷ったように手を下ろす。

京子「昨日はごちそうさまでした」

斉木「いいえ」

京子「奥さん、大丈夫でした？」

斉木「うん」

京子「一度疑われると女は怖いですよ」  
微笑む斉木。

京子は何かを言いたそうな顔をしている  
が言い出さない。

京子「浮気したことない？」

斉木「ないよ」

京子「本当に？妊娠中も？」

斉木「ないよ」

京子「ふうん」

斉木「あるんですか？」

京子「結婚してからはないけど」

斉木「その前は？」

手持ち無沙汰にタバコに火を点け煙を吐  
き出す。

京子「私22の時に付き合っていた人がいて、  
その人が留学して、1年近く遠距離恋愛して  
たの。7ヶ月くらい経った時に別の男の人に  
会って、何回かデートして、気持ちが傾いた。  
でも留学してる彼に別れを告げる決断はでき  
なくて、悩んでるって電話で話したら：ケン  
カになって、好きにしろって怒鳴られて電話  
切られた。一人で置いて行たくせに私だけ  
悪いのって思って、愚痴を聞いてもらいたく  
てその男の人を誘ったんです。その夜に飲ん  
だのが昨日の店で：。好きにしろって言うの  
はもう別れを告げられたと思ってたけど、正  
式にそういう話をしたわけじゃないから、す  
ごく微妙だったの。今夜この人とどこまでや  
っていいんだろうって。踊ろうって言われて、  
彼はキスしてきた。私は拒否しなかった」

斉木「留学の彼とはどうなったの？」

京子「日本に帰ってきた後に大喧嘩して、で  
も何かズルズル続いちゃったんですよ。本当  
に不思議だと思った、恋愛って。しばらくは  
どっちとも会ってて：でもこんな事続けるわ  
けにはいかないと思って、どちらか選ばなき  
やって：」

斉木「そのどちらかが元夫なわけだ」

京子「どっちだと思えます？」

斉木「留学してた方」

京子「よくわかりますね」

斉木「ジャズバーで会った方が元夫なら昨日

行かないでしょ」

京子「母親って自分の若い頃の話って子供にあまり話さないじゃない。二股かけてたとか。親なんて完璧じゃないんですよね、全然」

斉木「（頷く）」

京子「センセイはどうやって会ったんです？美鈴さんと」

斉木「略奪愛かな」

京子が意地悪そうに笑う。

京子「ほんとに？」

斉木「その時の妻には5、6年付き合ってる男がいて、でも惰性で付き合ってるような感じはあったらしい。男がいるのを承知で誘って、いい関係になった。別に浮気させるつもりもなかったし、よくないかとも思ったけど、コントロールできない感情ってあるんだって、その時初めて知った」

京子「悪い人」

暫しの間があり、京子は立ち上がるとコーヒー機の前へ。

ボタンを押してコーヒーが落ちる。

京子「いつまでも忘れられずに引きずる男と違って、女は平気で男を捨てて次の男を求め。出産をする女の本能がそうさせるって言うでしょ。今回わかった。その分、子を失った時、女は男より引きずるんだって。それも本能なのかも」

側にある美鈴と拓海の写真を見る。

京子「紆余曲折の末に男女が結ばれて子供が生まれる。その子は二人を結ぶ絆になる」

斉木「：」

京子「私たちの絆は：脆かった」

斉木、京子の肩に手を置く。

京子、ふり返ると斉木と目が合う。

見つめ合う二人。

京子の顔が斉木に近づく。

二人の唇が合わさる。

数秒間合わさった後、斉木が避ける。

斉木はだめだと言うように首を振る。

二人が互いに目をそらす。

京子が帰ろうとドアに向かうが立ち止まると、ふり返って斉木に微笑みかける。

京子「明日で最後ね」

何も言わない斉木を残してドアが閉まる。

#### □ボロアパート・表（夜）

錆びれた階段を上がってくる京子、ドア前で鍵を取り出す。

ドアを開けようとするが手が止まる。

迷っている京子の表情。

夜空を見上げると月が出ている。

#### □斉木家・リビング

窓外に見える月。

ソファに座っている斉木の傍らにウイスキーのボトルとグラスがある。

食卓にはラップをかけられた料理が置いてある。

斉木、ソファの上で寝ている拓海の寝顔を見る。

ドアが開いて美鈴が帰って来る。

美鈴「ただいま」

斉木「おかえり」

美鈴「ごめんね遅くなって」

斉木「いや、お疲れ」

美鈴「あら珍しい。飲んでるの？」

斉木「ああ」

美鈴「わ、おいしそう。食べていい？」

斉木「先に風呂入ってきたら？温めておくから」

美鈴「ありがと」

機嫌良く風呂場に消える美鈴。

#### □京子のマンション・風呂場

シャワーを浴びている京子。

滝行のように頭に水を受けている。

#### □同・リビング

濡れた髪でパソコンに向かっている京子。保存された動画を再生している。

×  
×  
動画―運動会の時の光景。

徒競走で一等になった雄馬がカメラに近づいてくると、カメラ目線でポーズをとる。

笑顔で迎える京子に無邪気に話す雄馬。

×

×

それを微笑んで見ている京子。

家の電話が鳴るが立ち上がらない。

留守番電話が作動し聞こえてくる声。

佳奈の声「私、桑田秀夫の妻でございます。

突然のお電話、申し訳ございません」

長い間がある。

京子は聞こえているのか無視しているの

か、引き続き動画を見ている。

佳奈の声「また：お電話致します」

録音後に流れる機械音声。

京子の顔から微笑みは消えている。

□ 齊木クリニック・カウンセリングルーム

(日替わり)

いつものように向かい合って座っている

二人、だがどちらも話さない。

京子はタバコを吸い、齊木はルービック

キューブをいじっている。

京子「それ趣味なの？」

齊木「けっこう奥が深いんですよ、これ」

京子「六面揃えられる？」

齊木「六面揃えるのは一筋縄ではいかない。

知ってる人は知ってますがこれは本当に複雑

な構造だね。これって人の感情に似てるんで

すよ」

京子「？」

齊木がキューブの一面一面を指差しなが

ら話す。

齊木「喜・怒・哀・楽。一面一面を感情に例

える」

京子「あとの二つは？」

齊木「憎しみと、愛しみ」

京子「…」

斉木「仮に6面が揃った状態を精神的安定とするなら、そこに辿り着くのは容易じゃない。何も訓練されていない人は一面揃えるのがやっと。何か事が起きて怒るか悲しむか、それによって他の感情はバラバラになる」

斉木「話しながら素早く一面を揃える。と、完成している一面を一度壊さないといかない。複数の面を同時に揃えるにはやみくもにやってもできない。コツと構造を理解しなければいけない」

話しながら他の面を揃える。

斉木「対立する面を同時に揃えるのはさらに難しい。どちらかを完成させようとするとどちらかが崩れる。憎悪と愛が決して両立しないのと同じこと」

京子「…」  
斉木の手が見えないくらい的高速でキューブを操る。

斉木「構造を理解するのは、心を分析して自分と向き合うのと似ている。その訓練がカウンスリングだと僕は思っている。そうして乗り越えた人は精神的自立を獲得する」

キューブの六面の色が揃う。

斉木「まあ、今はネットに攻略法が出てますけどね」

完成させたキューブを机に置く。

斉木「あなたは今どの段階ですか？」

京子「…」

斉木の穏やかな表情が消える。

斉木「まだ殺したいですか？」

京子の表情も変わる。

京子「センチが私ならどうする？」

斉木「聞いているのは僕だ」

京子「偉そうにしないで。私は女々しい患者じゃないのよ。人に向き合えって言うなら自分も逃げずに答えてよ」

二人のらみ合いがしばらく続く。

斉木「僕は殺さない」

京子の語気が強まる。

京子「軽々しく言わないでよ。あんたに断言できるわけ？そんなこと」

斉木「…」

京子「私がどの段階か？何も変わってない。ずっと同じ一面が揃っているだけ。どの一面かは言うまでもないよね」

斉木「…」

京子「今夜、雄馬の墓に言って話す。もうすぐ会いに行く。その前に仇は討つからねって」

斉木「…」

京子「雄馬が死んでから同じようなニュースを何回も見た。殺人犯の裁判を前にした遺族の心境。言う事は皆同じ。『極刑を望みます』。人間が作った法律で処刑するのは認められるのに、被害者による復讐はなぜ認められないの？」

斉木「そんなことを認めたら社会なんて成立しない」

京子「被害者が苦しむだけの社会は成立していると言えるの？」

斉木「…」

京子「もう…私にはわからない」

斉木「みんな何とか生きてる。乗り越えられる人もいればそうでない人もいる。けどみんな必死に生きてる」

京子「だから？」

斉木「君は卑怯だ。復讐を言い訳に逃げているだけだ。苦しみと向き合って乗り越えれば何か希望があるとは思えないのか」

京子「希望？」

斉木「…」

京子「私の希望が叶うの？」

斉木「…」

京子「私は何も言わない。でもセンセイがわからないとは言わせない。私の希望が叶うなら叶うと言って」

斉木「…」

京子「信じられない。よくそんなことが言えるわね」

斉木「君を止めるのが僕の仕事だ」

京子「何が仕事よ！ふざけないで！逃げてるのはどっちなの？私とセンセイの話をしてるのよ！あんたなんかと会わなきゃよかった！あんたと会わなきゃ私は狂ったままでいられたのに」

斉木「君は狂ってない。君の頭の中で殺せと叫んでる悪魔がいる。だがもう一つの声もある。それを聞こえないふりして突っ走るな」

京子「聞こえない、私には」

斉木「聞こえないなら俺が代わりに言う」

京子「…」

斉木「殺すな」

京子「…」

斉木「俺の、頼みだ」

京子の目が斉木を睨んでいる。

京子「無理よ」

斉木「…」

京子「私の頭の中には天使なんかいない。私には悪魔の声しか聞こえない」

斉木「…」

京子「これで、おしまい」

京子がゆっくりと立ち上がる。

斉木は止めることができない。

斉木「明日もここで待つよ」

ドアノブにかかった京子の手が止まる。

だがふり返らない。

京子「さよなら」

斉木を残しドアが閉まる。

### □京子のマンション・リビング（夜）

暗闇の中座っている京子がいる。

灰皿に置かれたタバコから煙が出ている。

京子「明日を乗り越えた時の…希望…」

### □斉木家・リビング

斉木「あると言ってあげられなかった」

斉木と向かい合って話を聞いている美鈴。

斉木「彼女に迷いがあるのと同じく俺にも迷いがある。彼女と同じ立場になった時、同じ

ことをしないと断言できない。おそらくこの世の中の誰も：」

美鈴「：」

斉木「人と人を結ぶのは愛情だ。そう信じて今までやってきた。けど今回、わからなくなった。明日の犯行を止めることはできる。けど彼女の意思を変えることはできない。自分で思いとどまってくれない限り」

美鈴が斉木の手を取る。

美鈴「少し休んで」

ベビーベッドの上で回っているメリー。

その下で寝ている拓海。

#### □京子のマンション・リビング（朝）

窓から朝陽が差し込む。

タバコが灰皿に置かれたまま灰になっている。

同じ体勢で座っている京子。

#### □同・風呂場

シャワーを浴びている京子。

#### □同・リビング

服を着ている京子。

ドアから出て行く。

#### □電車の疾走

#### □駅前

駅前から出て来て歩く京子。

#### □ボロアパート・表

歩いてくる京子。

#### □ボロアパート・中

双眼鏡で桑田の家を覗く京子。

窓のカーテンを閉めている佳奈が見える。

やがて玄関のドアが開き、桑田と佳奈が出てくる。

佳奈の手には供え用の花がある。

京子の表情が強ばっていく。  
双眼鏡を壁に投げつける。

□ 斉木クリニック・カウンセリングルーム  
座っている斉木、思いつめた表情。

□ ボロアパート・中

窓外を見ている京子。

桑田と佳奈が帰って来るのが見える。

二人は家の前で何やら話している。

買い物をしてくるとでも言っているよう

な佳奈、桑田を先に家に帰す。

しばらく玄関のドアを見つめているが、

やがてゆっくりと歩き出し、ボロアパー

トの建物の方に向かってくる。

京子「：？」

佳奈の姿が見えなくなる。

アパートの錆びた階段を登る音が表から

聞こえてくる。

京子の緊張が増す。

足音が止まり京子の部屋がノックされる。

動かない京子に再びノックが続く。

佳奈の声「開けてください」

京子は迷った末にドアを開ける。

佳奈の顔が現れ、頭を下げる。

×

畳に正座している佳奈。

佳奈「申し訳ありません。主人と一緒にもち

と早くにご挨拶に伺うべきだったんですが」

京子「：」

佳奈「どうしてもお話したい事があって：。

主人は：あの事件以来、ずっと罪の意識に苦

しんでいます」

京子、表情を変えないが反応する。

佳奈「事件の後、酒におぼれ、体調を崩して

退職しました。事件後しばらくは毎日のよう

に言っていました。なぜ殴ってしまったのか

：あんな事になるなんて思わなかったと：。

雄馬くんが夢に出て来ると言って、夜も寝れ

ない日々が続きました。今はようやく普通の

生活ができるようになって、自分のした事と向き合うことができています」

×

インサート。

× 苦悩する桑田の様子。

×

京子は佳奈と目を合わさない。

佳奈「私たちは子供ができず…」

京子が反応する。

佳奈「主人は元々子供が好きで教師になったので、自分の子を望んでいました。けれど私ができるにくい体で、懸命に不妊治療を続け、それでも授からないまま、私も38になりました。一年くらい前に主人が私に言ったんです。もう望むのはよそうって」

×

インサート。

× 座る桑田の後ろ姿。

佳奈の声「そう話した後の主人の後ろ姿は、寂しそうでした…」

×

言葉に詰まる佳奈を黙って見ている京子。  
佳奈「それから私たちの何かが変わりました。私は申し訳ないという思いが強く、主人が自分を責めたいのではないかと疑うようになり…主人も口数が減って」

京子「…」

佳奈「そして、あの事件が起きました」

×

回想。

× 授業中に雄馬を殴る桑田。

× ベッドの中で苦しむ雄馬。

× 京子、膝の上に乗せた手を握りしめる。

佳奈「ここから見られているのには、少し前から気づいていました。主人には言ってみせん」

京子「…」

佳奈「あなたの覚悟に私は怯えました。こういう時に人殺しの妻である私はどうすればよ

いのか：考えました」

全てを見透かしたような佳奈の目に押し  
られる京子。

佳奈、頭を床にこすりつける。

佳奈「主人は雄馬くんの命を奪いました。そ  
れは一生背負っていかねければいけないこと  
です。私は妻として、彼を支えていこうと思  
っています。柴田さんにはお詫びのしようも  
ありませんが、主人は自分のした事を後悔し  
ています。どうか許してやって頂けませんで  
しょうか」

京子「：許す？」

京子、佳奈に近づき、洋服をつかみ激し  
く揺する。

京子「何でそんな事が言えるの！人の子供を  
殺しておいて、何で許してくれなんて言える  
のよ！」

佳奈は頭を下げたまま動かない。

京子「顔をあげて」

動かない佳奈。

京子「あげて！」

顔をあげる佳奈。

京子「言ったよね。無理だったらごめんなさ  
いって。私も努力したのよ。でも無理だった  
の。だからあきらめて」

佳奈「：」

佳奈の手がポケットに伸び、ナイフが取  
り出される。

驚き身構える京子。

佳奈は刃を自分に向けて、腕を伸ばす。

京子の手をつかみ、柄を握らせ、京子の  
手を包むように両手で覆う。

佳奈「私は今、妊娠4カ月です」

京子の目が見開かれる。

佳奈「不思議ですよね、こんな事になった後  
に身籠るなんて：。私はあなたのように憎し  
みに満ちていない。自分の主人を守るために  
あなたを殺すなんてできません。でも、私た  
ちからあの人を奪わないでください」

京子の手握られたナイフが震えている。

佳奈が刃先を自分の腹に向けたまま力をこめる。

刃が佳奈の衣服の中に侵入していく。

佳奈「主人を殺すなら、私たちを殺した後にしてください」

腹に触れる寸前で止まっている刃。

京子「待ってよ……」

京子は体を震わせている。

京子「何でよ……」

京子の目から涙が落ちる。

×

×

佳奈の姿はなくなり京子が同じ場所に座っている。

手にはナイフが握られたまま。

刃の先端に血がついている。

その血を見る京子、絶望の表情。

## □濃い灰色の空

### □ボロアパート・中（夜）

ロープがロフトに固定され、先端で輪っかが作られている。

台の上に乗っている京子、目の前の輪を手に取る。

頭を通し首にかける。

足を震わせ、今にもイスから落ちそうな時、両足に触れる何かを感じる。

雄馬が京子の足を支えるようにして立っている。

京子「！」

何かを訴えるような目の雄馬。

次の瞬間、雄馬の姿は消えている。

ロープから頭を外した京子、呆然と立ち尽くす。

## □夜道

走る京子。

### □斉木クリニック・カウンセリングルーム

斉木が机に向かっている。

開かれるドア。

京子がドア前に立っている。

息使いが荒く、目には涙の跡。

斉木が立ち尽くしている京子に近づくと、涙を手で拭ってやる。

その手を取る京子、見つめ合う二人。

斉木の胸にもたれかかるように抱きつく。

京子「ひどい顔でしょ」

斉木「…」

京子「ぜいたく言わないから、しばらくこのままでいさせて」

そっと背中を支えてやる斉木。

暗転。

#### □青い空（日替わり）

#### □スーパーマーケット

京子がレジで働いている。

話しかけてくる中年女性客に笑顔で対応する京子。

#### □同・事務所

前園と小田が休憩している。

京子が仕事を終えて入ってくる。

京子「お疲れ様です」

気まずい二人は愛想笑いをする。

京子「前園さん、来月の交代希望のところ、私代わりますよ」

前園「え、本当に？」

京子「ええ」

前園「わくうれしい。ありがとう。もう柴田さん大好き！」

微笑む京子。

#### □墓地

雄馬の墓前に立っている京子。

穏やかな表情。

#### □カウンセリングセンター・会議室 被害者遺族の会。

話しているのは京子。

京子「例えどんなに苦しくても、あきらめちやダメだって、雄馬が教えてくれました。正直、希望があるのかはまだわかりません。でも、徐々に前を向いて生きて行こうと思いません」

×

×

会が終わり解散する。

倉元が京子に近づいてくる。

倉元「柴田さん」

京子「どうも」

倉元「少し元気になられたみたいで、よかったです」

京子「はい」

倉元「僕も最近やっと仕事に集中することができるようになって、忙しいのが救いになるって言うのも悲しい話ですが」

京子「犯人は捕まりそうにないんですか？」

倉元「ひき逃げなんてすぐに捕まると思ってたんですけど、車が見つからないらしくて…。車種も特定できないから見つかるわけないですよね。妻と娘を殺した奴がどこかで生きているかと思うと…。憎む相手がいればむしろ楽なんですけど」

京子「…」

倉元「すみません、こんな話を…」

京子「いえ、そんな」

倉元「あの…」

京子「はい？」

倉元「もしよかったら今日食事でも…」

京子は少し面食らう。

京子「ごめんなさい。今日はちよつと約束があるのです…」

倉元「そうですか、じゃあまた今度…」

京子「あ、しばらく斉木先生見ないですけど、知ってますか？」

倉元「誰ですか？」

京子「カウンセラーの」

倉元「？…カウンセラーでそんな人はいませんよ」

京子の表情が固まる。

### □道（夕方）

歩いている京子、戸惑っている。  
十字路に差し掛かり止まる。  
方向を確かめるようにして歩き出す。  
別の十字路でも立ち止まり、道を確認して歩き続ける。

### □齊木家・表／室内（夜）

「齊木」の表札。

ドア前に立つ京子、表情が強ばっている。  
チャイムを押すが応答はない。  
辺りを見回しノブをひねると鍵がかかっている。  
ドアを開け、恐る恐る中に入る。

室内は暗く月明かりが窓から漏れている。  
人の気配はなく京子はリビングへと歩を進める。  
リビングはきちんと整頓されている。  
一角に置かれたベビーベッド。

音一つない静寂の中、ベビーベッドの上のメリーが小さな音色と共に回っている。  
京子、足を踏み出すのを躊躇っている。  
ゆっくりと歩き出し近づく京子。  
恐る恐るベビーベッドの中を覗く。

中に寝かされているのは赤ん坊の人形。  
産着に包まれ不気味に目を見開いている。  
口を押さえて声を出しそうになるのをこらえる京子。

気を落ちつけ部屋を見渡す。

一角に箱などの雑物が乱雑に積まれているのを見つける。  
よく見ると積まれた雑物の後ろにドアらしきものが見える。

京子、玄関の方を一度確かめた後、その一角に近づき、積まれた物を順にどかしていく。

徐々に隠されていたドアが現れる。  
ドアノブをつかみゆっくりと開ける。

□同・一室

ドアがきしみ音を鳴らして開く。  
薄暗い部屋の中は誰かに荒らされたよう  
な有様。

崩れた祭壇があり、割れた写真立てが床  
に転がっている。

その写真―笑顔の美鈴と拓海。

その横に割れた花瓶と枯れ果てた花。

蒼白の顔の京子。

×

フラッシュ。

×

倉元「斉木さんて：時々来てた斉木さんのこ  
とですか？奥さんとまだ赤ん坊だった子供を  
殺された。ここに来ても誰とも話そうとしな  
いんだけど：」

×

フラッシュ。

×

被害者遺族の円から外れて斉木が座って  
いる。

うつろな目で現実感のない表情。

×

フラッシュ。

斉木「あまりにもつらい出来事が起きると、  
幸福に生きるためにつらい記憶は封印してし  
まう、精神安定のために脳がそういう働きを  
する事があるらしい」

×

京子が美鈴と拓海の遺影を見ている。

京子「封印：部屋ごと：記憶も：」

その時玄関のドアが閉まる音が聞こえる。

京子「！」

□同・リビング

斉木が入ってくる。

斉木「ただいま」

美鈴「おかえり」

笑顔の美鈴が斉木を迎える。

ベビーベッドの中の拓海が寝ている。

斉木「また寝てるんだ。つまらないな」

美鈴「つまらなくないよ。昼は大変なんだから」

斉木「触ったら起きちゃうかな」

美鈴「やめてよ。本気で怒るからね」

斉木「わかったよ」

斉木が指で触れずに頬を突つくマネをする。

優しく微笑んで拓海をながめている。

斉木「夜中もこれくらい寝ててくれるといいんだけどな」

斉木の視線の先にいるのは京子。

指先にあるのは赤ん坊の人形

京子は絶望の表情で斉木を見ている。

斉木「な？」

京子、どうしていいかわからずうなづく。

斉木はソファに腰を下ろすとテレビをつける。

京子は呆然とその様子を見ている。

斉木「明日どうする？俺も一日空いてるから拓海見てもいいよ」

斉木の視線は京子に向いている。

斉木「そう、じゃあパート終わったら一緒に公園でも行く？」

京子「…」

斉木「うん、いいよ外食でも。拓海がいて落ち着いて食べられるかわからないけどね」

京子の目から涙があふれる。

頭によぎる斉木の言葉。

フラッシュ。

斉木「今の妻と出会って拓海が生まれた時、人生の意味がわかった気がした。何よりも大切に思える存在が本当にあるんだって…」

斉木「想像が生きる支えになってるんですよ。強引に現実を知らせてしまったら、おかしくなってしまうかもしれません」

×  
涙を拭う京子、自分を納得させるように首を振る。

京子「…そんな訳ない」

京子が座っている斉木に手を伸ばす。  
京子「来て」

斉木の手を取って立たせ、引っ張るように封印された部屋へ向かう。  
ドア前で立ち止まり、斉木を正面から見据える。

京子「あなたは私を救ってくれた。言ったよね？復讐を言い訳に逃げてるだけだって。誰よりも弱かった私が立ち直ったの。だからあなたは逃げちゃだめ。私よりずっと強い人なんだから」

斉木はキョトンとした顔をしている。  
京子が促し二人は部屋に入って行く。

### □同・一室

封印された部屋に足を踏み入れる。

斉木、部屋を見回しボーっとしている。

崩れた祭壇が目に入る。

倒れている美鈴と雄馬の笑顔の写真。

斉木の様子を見ている京子。

突然、雷光が走ったような頭痛が斉木を襲う。

頭を押さえる斉木。

祭壇の美鈴と雄馬の写真が歪む。

再び激しい頭痛に苦しむ斉木、奇声をあげながら祭壇をひっくり返し、壁に投げつける。

京子は脅えつつ見ている。

頭を抱えて絶叫している斉木。

×

×

斉木の脳裏に浮かぶフラッシュバック。

美鈴の笑顔――。

拓海の笑顔――。

悲鳴のような赤ん坊の泣き声が聞こえる。ソファの上に仰向けになっている美鈴、服は切り裂かれたように破け、首には絞められた跡。

腫れた目が宙を見つめている。

気が狂ったように聞こえる拓海の泣き声の中、繰り返される断片的なフラッシュ。

一転して静寂の部屋。 ×  
力なく立っている斉木の体が揺れたかと思うと、糸が切れたように崩れ落ちる。 ×  
暗転。

□ 斉木クリニック・表（2年前）

斉木と美鈴が看板を前に立っている。  
美鈴が大きいお腹をさすっている。

美鈴「がんばってね」

斉木が微笑んでうなずく。

□ 斉木家・中

生まれたばかりの拓海を眺めている斉木。  
人差し指で拓海の頬を突つく。  
突つくたびに拓海が笑うのをおもしろがって続ける。

その内拓海が不機嫌になり、斉木の指を嫌がって押しつける。

斉木「あ、嫌がってる」

美鈴「ちよっと泣かさないでよ。本当にかうの好きなんだから」

拓海が斉木の人差し指を握る。

斉木「捕まっちゃった。意外に強いな力」

台所からその様子を見ている美鈴、クスツと笑う。

暗転。

□ 黒地

拓海の泣き声が響いている。

激しい息づかいの美鈴。

震えている声。

美鈴「お願い…。子供だけは…助けてください…。」

□ 斉木家・玄関／リビング（夜）

斉木が帰ってくる。

斉木「たがいま」

奥に見えるリビングは暗くシーンとしている。

斉木「?…美鈴?」

リビングに入って来た斉木の動きが止まる。

ソファの上、半裸で絶命している美鈴。暴行された跡。

首を絞められた黒いアザが見える。

開かれた目が宙を見上げている。

部屋は荒らされている。

ベビーベッドの上のメリーが小さな音色と共に回っている。

斉木がおぼつかない足取りで近づく。

中の拓海は動かない。

斉木のうつろな目。

### □ 斉木家・一室

喪服姿の斉木が床に座り込んでいる。

祭壇に飾られた美鈴と拓海の遺影。

嗚咽をもらして泣いている斉木。

突然奇声をあげて立ち上がると、部屋中の物をひっくり返し、荒らし始める。

割れる花瓶、倒れるタンス。

頭の中でプツンと何かが切れる音が聞こえる。

能面のような顔で立ち尽くしている斉木。

リビングから拓海の泣き声と美鈴の声が聞こえてくる。

美鈴の声「どうしたの、何で泣くの?」

斉木「…」

### □ 同・リビング

部屋から出てくる斉木。

ベビーベッドの横で拓海を抱いてあやしている美鈴。

斉木は引きつったような笑顔でそれを見ている。

美鈴「あらオムツ交換だ。ねえあなた、オムツ取ってくれる?」

美鈴が斉木を見て話しかける。

斉木は笑顔で頷き、一室のドアを閉めて移動する。

閉められた一室のドア――。  
段ボールや雑物がカットを重ねる毎に増  
えていく。  
やがてドア全体が隠される。

#### □同・一室

封印された薄暗い部屋。  
割れた写真入れの中で微笑んでいる美鈴。  
暗転。

#### □同・リビング（現在）

ぼやけている視界。  
ソファで寝ている斉木が目を覚ます。  
横には座って見守っている京子がいる。  
放心状態の斉木、京子を見ている。

京子「起きれる？」

斉木、京子の力を借りて起き上がる。  
しばらく状況を把握するようにあちこち  
を見ている斉木。

斉木の目から涙が落ちる。

斉木「死んだのか……」

京子が慰めるように斉木の頭を撫でる。  
憔悴しきった表情の斉木。  
見つめ合う2人。

京子「大丈夫？」

斉木は小さく頷く。

京子「……おかえり」

京子から斉木に唇を重ねる。

#### □スーパーマーケット（日替わり）

働いている京子。

×

×

食材を買い込んでいる京子。

前園のレジにそれを置く。

前園「あら随分買うのね。ご馳走でも作る  
の？」

京子「ちよっと作り置きしようと思って」

前園「店長に内緒で割引券使った事にしてあ  
げるね」

京子「ありがとうございます」

□ 齊木家・中

買い物袋を持って帰ってくる京子。  
リビングのソファに齊木が座っている。  
覇気がなくポーツとしている。

京子「ただいま」

齊木「おかえり」

京子「お腹すいた？」

齊木「うん」

京子「ねえ、一緒に作らない？」

齊木「うん」

×

×

台所で料理の支度をしている二人。

野菜の皮を剥いている齊木、ぎこちなく  
うまくできない。

齊木は表情を変えず剥き続ける。

齊木を見守るようにしている京子。

京子「ゆっくりでいいよ。ゆっくりで…」

□ 住宅街の家

歩いてくる京子、ある家の前で止まる。

「佐山哲夫・藤子・菜穂」の表札。

京子がチャイムを押すと女性が出て来る。

京子「柴田と申します。佐山さんいらっしゃいますか」

□ 佐山家・中

仏壇に線香をあげている京子。

佐山藤子が居間に座っている。

京子の隣にいる真野美幸(40)。

京子「すみません突然。センターで住所を聞いて、家から近かったもので寄らせて頂きました」

藤子「とんでもない。(仏壇を見て)主人も喜んでいると思いますよ」

美幸が京子に囁くように話しかける。

美幸「あの、ご存知かもしれませんが、姉は娘のことを…」

京子「はい、知っています」

仏壇に飾ってある夫の写真。

娘の写真はない。

藤子「菜穂とは会ったことあったかしら。一度会に一緒に行ったんですけど」

京子「……いいえ」

藤子「お茶でも入れますね。どうぞソファにかけて下さい」

藤子が台所に向かうと、美幸が京子に近づく。

美幸「触れないでやって下さい。今お医者さんにかかって、徐々に回復していくと思います。話を合わせておいてください」

京子「……はい」

藤子「今コーヒー入れますからちよつと待って下さいね。柴田さん、この近くに住んでいたなんて偶然ね。○○公園に行くことあります？私の好きな所なの」

京子「ええ、あの遊歩道、桜が咲くと毎年散歩するんです。よかったら今度お花見でもしませんか」

藤子「いいわね、亡くなった主人も桜が好きでね」

京子、美幸と目配せして

京子「時々、お邪魔してもいいですか？お話しに」

藤子「ええ、もちろん」

京子の笑顔。

### □道（日替わり）

芥木と京子が歩いている。

並木道にある桜の木々が芽を吹き始めている。

京子が芥木の手を握る。

京子「ねえ」

芥木「ん？」

京子「あの場所に行ってみたいな」

### □自動車道

海に見える自動車道を走っている車。

運転しているのは芥木、助手席に京子。

二人は口数が少ないが、時折目を合わせ

ては微笑む。  
海風を気持ち良さそうに感じる京子。

### □丘の上

木々の間から見える海。  
カウンセリングルームにあった絵と同じ  
光景を眺めている斉木と京子。  
斉木がタバコをくわえて火を点ける。  
京子はそれに少し驚く。  
風が強くなかなか点火しない。  
京子も手伝ってライターを両手で覆う。  
後ろの森林公園で小さな子供たちが楽し  
そうに遊んでいる。

その様子を眺めている二人。

斉木「生きが良かったよな」

京子「：そうね」

斉木が京子の肩を抱き寄せる。

斉木「また子供を作ったら、残酷かな」

京子は少し迷いつつ答える。

京子「いいんじゃない？」

水平線に近づく夕陽。

### □斉木家・寝室（夜）

斉木と京子がベッドで抱き合っている。

斉木に愛撫される京子は幸せに身を委ね  
る。

×

情事後、身を寄せ合って寝ている二人。

×

斉木「愛してる」

唇を重ねる。

京子「何か食べる？」

### □同・リビング

テーブルに並べられた料理。

斉木と京子が食べながら話している。

斉木「なんか、トマト尽くしだね」

京子「すごい安かったの。質がいいからって  
前園さんに勧められて。嫌いじゃないでし  
よ？」

斉木「好きだけど。前園さんて？」

京子「同じパートの人。ご主人が調理師免許持っていて料理のこと詳しいの。イタリア料理の本貸してくれてトライしてみたの。凝ってるでしょ」

斉木「うん、うまいよ」

京子「そう？」

斉木「腕あげたね」

京子「え？」

斉木「こんな料理作った事なかったのに」

京子「まだ2回目でしょ、手料理食べるの」

斉木「これから2、3日はトマト料理が続くのかな」

京子「子供じゃないんだから文句言わないの」

斉木「そのご主人ってどこかでコックしてるの？」

京子「場所は聞いてないんだけど、イタリア料理のお店で働いているみたい。今度ちゃんと聞いてくるから行ってみようか」

斉木「うん。そう言えば〇ヶ崎の入口にあるイタリアレストランで評判いいんだよ」

京子「〇ヶ崎？」

斉木「この前言ったじゃん」

京子「ああ。へえ、あつたつけレストランなんて」

斉木「隠れ家っぽくてわからないんだけど。大通りから見えないし。〇ヶ崎って学生の頃バイク好きの友達二人とよく行ってたんだ。俺は乗れなかったから後ろに乗っけてもらってたんだけど。毎回あの高級レストラン見て入ってみたいって思いながら同じ通りの牛丼屋で食べてた」

京子が笑う。

斉木「いつか女連れて食べに行こうって話してたな」

京子「もう叶ったの？」

斉木「学生の時付き合ってたコとは行ってないよ」

京子「その後は？」

斉木が少し言い淀む。

斉木「仕事で忙しくなって…拓海も生まれたし…。小さい子供連れて行くようなところじゃないから」

京子「…そうね」

斉木「せっかくだし、久しぶりにデートらしいデートでもする？」

京子の持つフォークが止まる。

京子「…何て言った？」

斉木「デートらしいデートでもする？」

京子「…久しぶりに？」

斉木「デイズニーって最後までち言った？」

京子の表情が強ばっていく。

斉木「聞いてる？」

京子「え？」

斉木「シーとランド」

京子「私？」

斉木「最後に行ったのいつだっけ」

京子「…私？」

斉木「俺らが」

京子の顔が凍りつく。

斉木「俺はシーの方がよかったけど、久しぶりにランドにしようって言われて譲ったんだよな」

京子の口が震える。

斉木「美鈴」

必死に動揺を隠す京子。

斉木は優しそうに笑うと料理を口に運ぶ。

斉木「これってベーコンはさんでるの？」

京子は溢れ出そうな涙を我慢している。

京子「…うん」

斉木「冷めない内に食べた方がいいよ」

京子「…うん」

京子が震える手で食事を続ける。

#### □京子のマンション・中

絶望の表情で座っている京子。

#### □墓地近くの道（日替わり）

京子が呆然と歩いている。

墓地へと向かう道で、反対側から桑田秀

夫と佳奈が歩いて来るのが見える。  
思わず身を隠す京子。

桑田は神妙な面持ちで歩いているが、佳奈の問いかけには笑顔で応えている。

佳奈「あ、蹴った」

佳奈がお腹を押さえて立ち止まる。

桑田「ほんとに？」

佳奈「うん、ほら」

桑田が佳奈のお腹に手をあてる。

やがて二人は笑顔で立ち去る。

その様子を見ている京子。

### □墓地

雄馬の墓地に供えられたばかりの花。

京子はその前に立っている。

京子「雄馬、お母さん好きな人ができたよ…でもね、その人の中に、私は存在しないみたい」

つぶやくと涙を流して膝をつく。

桑田が供えた花を握りしめて引きちぎる。

投げ捨てられる花びら。

京子は墓石にすがるように泣き続ける。

× ×

フラッシュ。

雄馬の笑顔―。

佳奈のお腹を触る桑田―。

× ×

京子「なんで…私たちだけがこんなに苦しむの…」

涙が止まり京子は顔を上げる。

その目は狂気に満ちている。

### □ボロアパート・外観（夜）

#### □ボロアパート・中

薄暗い部屋で光るライターの火。

座っている京子が煙を吐き出す。

思いつめた表情の京子が恐る恐るナイフを手にする。

柄を握りしめる京子、だが怯えるように

手離す。

×

回想。

×

佳奈の鬼の形相。

京子の握るナイフが佳奈の腹に微かにめり込む。

先端が血で濡れたナイフ。

×

京子、大きく息を吐き出し、悔しそうに歯を食いしばる。

×

フラッシュ。

×

倉元「憎む相手がいればむしろ楽なんですけどね」

×

京子の目が見開かれる。

何かに気づいたようなその表情。

京子「悪魔の…声」

×

×

回想。

斉木「聞こえないなら俺が言う。殺すな」

×

×

京子「天使と悪魔が…入れ替わる…」

京子の目、漆黒の闇のように黒い。

### □斉木家・リビング(夜)

電気もつけずにテレビを見ている京子。

テレビに映っているのは、以前斉木が見ていた桑田の映像。

桑田の顔が無表情で見ている京子。

斉木が帰ってくる。

斉木「なに見てるの？」

答えない京子。

斉木「美鈴？」

斉木が後ろから京子の肩に手を置く。

京子が独り言のように囁く。

京子「…思い出したの」

斉木「え？」

京子「拓海を殺した男の顔」

斉木「…！」

テレビ画面が桑田の顔で静止している。

□黒い雲が月を覆う

□斉木家・リビング

イメージと現実が同じ空間で進行する。  
暗い部屋に一人座っている斉木。  
何もなかった場所にベビーベッドが現れる。

拓海の泣き声が聞こえる。

ベビーベッドに近づく黒い影。

枕を持つ手が拓海の顔に迫る。

泣き声が止まる。

斉木の横に女性が横たわっている。

白い肌が露出し、洋服が裂かれ、首には絞められたアザ。

その顔は京子、顔には殴られた跡があり、うつろな目をしている。

斉木「…」

ふと気付くとテレビがついている。

斉木「！」

桑田の映像。

京子の声「あの時見たの、この男の顔を。拓海の顔に枕を押しつけて殺した」

ベビーベッド脇にいる男の影、その顔が

徐々に見えて来る。

その顔は桑田。

斉木の横に倒れている京子がしゃべる。

京子「私は：何もできなかった」

京子の腫れた目から涙が落ちる。

斉木が京子の涙をぬぐう。

傷だらけの京子が起き上がり、斉木の顔を両手で覆う。

京子「私を愛しているならお願い」

回想。

斉木の顔を覆うように両手で撫でている

京子。

京子「殺して」

斉木の横にいた京子の姿は消えている。  
桑田の姿もベビーベッドも消えている。  
テレビ画面だけがみついている。  
桑田の静止画。  
斉木が観察するように見ている。

#### □繁華街（日替わり・夜）

人ごみの中に立っている京子。  
近づいて来る男を認めると会釈する。  
その男は倉元。  
二人は並んで歩き出す。

#### □ジャズバー

奏でられる演奏。  
テーブルで食事をしている京子と倉元。  
（以降のシーン、音楽が流れる中進行）

#### □夜道／桑田家

人気のない住宅街を一人歩いている斉木。  
桑田家の前に立つ。  
チャイムの音。

#### □ジャズバー

ほろ酔いの倉元が笑って話すのに応じる  
京子。

#### □桑田家・玄関／中

ドアを開ける桑田佳奈。  
斉木は無言のまま、佳奈の存在が見えな  
いかのように中に入ろうとする。  
止める佳奈を振り払いリビングへ。  
食事中的桑田、突然入って来た斉木に驚  
く。  
桑田の姿を見るやいなや、突然つかみか  
かる斉木。

#### □ジャズバー

京子の顔が少し曇る。  
倉元の話に黙って聞いている。

□桑田家・中

斉木、桑田を殴りつけ、頭を地面に打ちつける。

意識が朦朧となった桑田の首を絞める。渾身の力で締める、狂気の表情の斉木。その顔が一瞬京子に変わる。鬼の形相の京子。

□ジャズバー

倉元を見据えている京子の表情。瞬きをしない見開いた目。

□桑田家・中

佳奈が台所から包丁を取り、叫びながら斉木を脅す。

耳に入らない斉木は桑田の首を絞め続ける。

佳奈が斉木を切りつける。  
カーペットに飛び散る血。  
血を流した斉木が床に転がる。

□ジャズバー

フロアで踊っている京子と倉元。  
京子の複雑な表情。  
桑田家の乱闘と適宜カットバック。

□桑田家・中

斉木が起き上がり佳奈に迫る。  
佳奈の体をつかむと振り回し、壁に打ちつける。

桑田が朦朧としながら立ち上がり、地面に落ちている包丁をつかむ。

佳奈の首に手をかけている斉木。  
桑田、斉木の背中に体当たりするようにぶつかる。

背中刺さる刃。

桑田が包丁を抜くと血が噴き出す。

斉木は動きが鈍くなるも、痛みを感じないかのように桑田に向かって行く。  
パニックになった桑田はもう一度、斉木

の腹を刺す。  
ゆっくりと倒れる斉木。

気絶している佳奈。  
混乱している桑田、血だまりの上に立っている。

佳奈に駆け寄り抱き、かかえて玄関に向かう。

血を流し、仰向けに倒れている斉木、細く開けた目が天を仰いでいる。

### □ジャズバー

徐々に曇って行く京子の表情。

倉元の胸に顔をうずめ、歯を食いしばる。  
泣きそうになるのを必死にこらえている。

(音楽が徐々に弱まっていく…)

### □斉木クリニック・カウンセリングルーム (回想)

時計が5時を指す。

斉木「時間です」

京子、うなずいて立ち上がる。

ドアノブに手をかける京子、立ち止まり

斉木の方にふり返る。

京子「ねえ先生…」

斉木「ん？」

京子「さっきの話：抑圧された記憶」

斉木「うん」

京子「仮に先生があの人と同じ立場になったら、どっちを選びます？ウソの中で幸せに生きたいですか？それとも、真実を知りたいですか？」

微笑む斉木、答えようと口を開く。

### □警察署・取調室

京子の表情―。

対峙している秋本。

秋本「先生がおかしくなった後は会ってないの？」

京子「はい」

秋本「何で彼が桑田さんを襲ったか、心当た

りある？」

京子は首を振る。

秋本「あんたが殺したいほど憎んでた桑田さんをあんたのカウンセラーが襲ったんだよ。何も知らないっての？」

京子「私は復讐を計画し、向かいのアパートを借りました。でもセンセイのおかげで思い留まったんです。それが罪になりますか？」

京子は秋本から目をそらさない。

睨みつける秋本にも動じない。

秋本「俺も色んな人間見て来たけど、あんた：大した悪女だね」

京子「（微笑む）私は：悪魔の声が聞こえるんですよ」

秋本「（ため息）また来てもらうことになるから。しばらくあんたから目を離さないよ」

京子「：」

秋本「ちなみに、奥さんは無事だそうだよ。

お腹の赤ちゃんも」

京子「：そうですか」

### □同・表

出てくる京子。

入口で訝しげな顔で見送る刑事たち。

### □住宅街

歩く京子、まっすぐ前を見据えている。

京子の声「私は弱い人間でした。ごめんなさいね、センセイ」

歩いている京子。

京子の声「誰かを愛することによって悲しみを乗り越えようと思った。でも、あなたを愛することはできなかつた」

十字路に差し掛かる京子、一旦立ち止まり三方向を順に見る。

そして一方に歩き出す。

京子の声「私を救ってくれたあなたを死に追いやった。そして今日、自分が助かるために嘘をついた。もう人生に意味などないと思っていたのに：。絶対に捕まるわけにはいかな

い。また：愛する者ができてしまったから」  
再び十字路で立ち尽くす京子、お腹にそ  
つと手をあてる。

おわり